

果樹カメムシ類の越冬密度調査結果について

令和8年3月19日
埼玉県病害虫防除所

ナシ、モモ、カンキツなどの果樹を加害する果樹カメムシ類の発生量の予測を目的として、チャバネアオカメムシなどの越冬密度調査を行いました。

調査の結果、チャバネアオカメムシ（越冬成虫）の捕獲数は1地点（計3㎡）あたり1.75頭/3㎡で、平均虫数（1.10頭/3㎡）と比較してやや多く、確認地点率は63%で、平均確認地点率（45%）よりやや高くなりました。

果樹カメムシ類は、地域によって越冬密度が異なり、スギ・ヒノキが近くにある山間部の果樹園では多く飛来することがあります。

また、越冬密度が低い年でも気象条件やスギ・ヒノキの球果の量によって発生が多くなる場合もあります。今後、病害虫防除所が発表する情報（予察灯、フェロモントラップでの誘殺数）を参照し、果樹園等への初期飛来に注意して適切に防除してください。

1 調査時期

令和8年2月5日～2月10日

2 調査地点

8地点（表参照）

3 調査方法

- (1) 雑木林の南斜面や林床から、1地点につき3か所（各1㎡）の落葉を採取。
- (2) 採取した落葉をビニル袋に詰めて口を閉じた状態で温室内（25℃加温）に2週間程度静置し、体色が緑化したチャバネアオカメムシ等の成虫数を調査。

4 結果

1地点あたりの平均越冬虫数は1.75頭で、平均（過去10年の平均）虫数1.10頭に比べ多くなっています。確認地点率は63%で、平均確認地点率45%に比べやや高くなっています。（表、図1、図2）

特に越冬量の多かった一昨年（1地点あたり平均越冬虫数4.75頭、確認地点率75%）と比較すると少なくなっていますが、昨年との比較で虫数は大きく上回っています。

また、果樹カメムシ類の一種であるツヤアオカメムシ、イネの重要な害虫であるイネカメムシも落ち葉から確認されました。

表 果樹カメムシ類の越冬成虫数（生存個体）

単位：3㎡あたり頭数

採取地点	チャバネアオカメムシ	その他果樹カメムシ類	イネカメムシ	
			生存	死亡
東松山市松山	0	ツヤアオカメムシ	0	0
鴻巣市関新田	9	ツヤアオカメムシ	3	5
寄居町鉢形	0		0	0
神川町新里	0	ツヤアオカメムシ	0	0
加須市上種足	2	ツヤアオカメムシ	0	6
蓮田市高虫	1	ツヤアオカメムシ	0	0
春日部市内牧	1		1	0
久喜市清久	1		0	1
計	14			

平均越冬成虫数（1地点あたり） 1.75 （過去10年の平均虫数 1.10）

確認地点率 63% （過去10年の平均地点率 45%）

注）イネカメムシは果樹を加害しませんが、近年、水稲での被害が急拡大しているため参考として掲載しています。

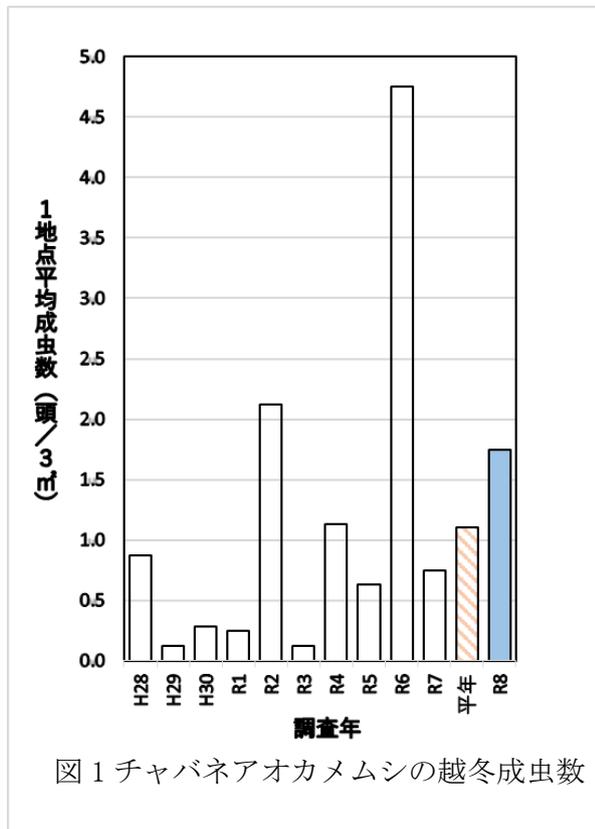


図1 チャバネアオカメムシの越冬成虫数

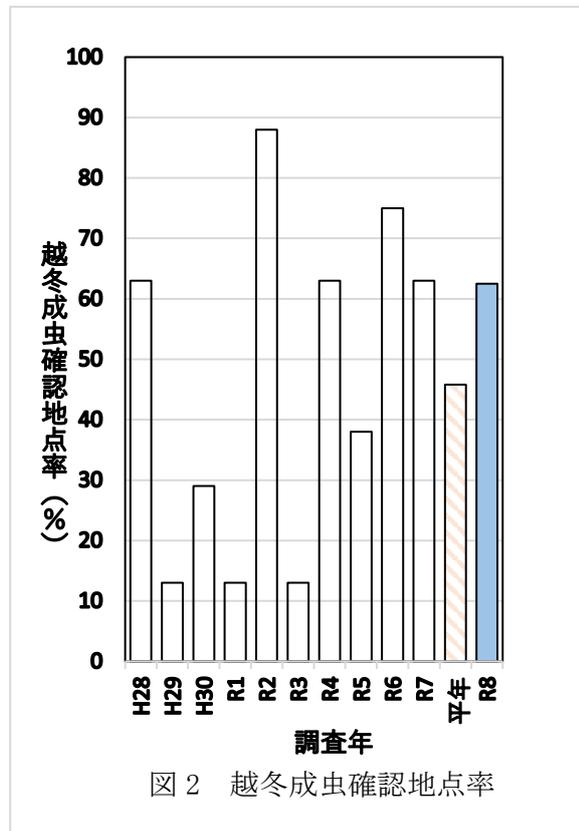


図2 越冬成虫確認地点率

○生態と被害

・チャバネアオカメムシ

体長10~12mmで光沢のある緑色で、前翅は紫がかった茶色をしています(図3)。広食性で、4月から夏にかけてはクワ、サクラ、ヒイラギ、キリなどに、夏以降はヒノキ、スギ、キリなどに寄生します。ナシ、モモ、ウメ等多くの果樹を加害しますが、幼虫はスギやヒノキの球果を餌として発育するため、本種は果樹園では増殖しません。



図3 チャバネアオカメムシの成虫
(体長10~12ミリメートル)

・被害(果樹カメムシ類共通)

果樹園に飛来し、果実を吸汁します。加害を受けると、吸汁部がくぼんで奇形果になります。収穫直前の被害では、くぼみの程度は軽くなりますが、吸汁部周辺の果肉は白くスポンジ状となり、商品価値が損なわれます(図4)。



図4 被害を受けたナシの果実とその断面

5 その他

本調査と併せて、ツバキやユズなど常緑広葉樹の樹冠内においてクモの巣で綴られている葉の内部を調査した結果、約30%の割合でツヤアオカメムシ成虫(図5・6)の越冬が確認されていることから、今後の果樹カメムシ類の発生には注意が必要です。



図5 ツヤアオカメムシの成虫
(体長約15ミリメートル)



図6 クモの巣で綴られた葉の内部で確認されたツヤアオカメムシの成虫